別紙様式1

令和6年度　学校評価表

（ 中間 ・(最終) ）　　学校名　三原市立須波小学校　　校番（ 7 ）

a 学校教育目標	夢と志を抱き、自ら学び、心豊かに、たくましく生きる児童の育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】（自校の使命）〇志を抱き、その実現に向けて考え、行動できる未来の創り手の育成 【ビジョン】（自校の将来像） 〇児童の確かな学力、豊かな心、健やかな体をバランスよく育成する学校　〇自己研鑽に励み、子供に寄り添い、チームワークを大切にする教職員 〇保護者・地域に信頼される学校 【育成をめざす資質・能力】 〇課題発見・解決能力　〇コミュニケーション能力　〇主体性　〇自己理解

評価計画						自己評価					改善方策	Ⅰ 学校関係者評価			
	c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	7月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	改善方策	評価 イ	評価 ロ	評価 ハ	コメント
確かな学力	学び方の獲得と確かな学力の向上を図る。	(1) 基礎基本の定着を図る。	◎教職員の授業力向上（ファシリテーターとしての教師の役割） ・児童の「主体的な学び」を実現する授業づくり（必要感のある教材、思考力を深める発問、ICTの効果的な活用、振り返りの充実「R80」の実施）	・「ファシリテーター力アンケート」において、目標値（平均70%）を達成した教職員の割合	80	85.7	100	125.0 %	A	ファシリテーター力アンケートにおいて、目標値を達成した教職員の割合は、100%で目標を達成した。どの項目においても、7月に比べ、肯定的な回答をした教員の人数が増加した。特に、「3児童が自ら考えたり、自ら取り組んだりできるような手立てがあり、有効であったか」と「8全教科の授業の終わりにR80で振り返り、振り返りをシェアリングする時間を設けたか」の設問において肯定的な評価をする教員が増加した。これは、教材研究をする際に、教職員一人一人がファシリテーター力の項目を意識した授業づくりをしている結果だと考える。	引き続き、教師のファシリテーター力7項目を意識した授業づくりや実践を進め、定期的に評価するなど小さなPDCAサイクルで取組を積み重ねていく。	5			〇教職員の方々の熱心な取組の成果が確かな姿で表れ、魅力的な学校の姿に変化されたと最後の授業で実感した。 〇わからない所をそのままにせず、その場で聞いて理解できる雰囲気が出来つつあるようで、児童全員の学力アップにつながっていることは、とても評価できると思う。 〇児童の「主体的な学び」を実現する授業については、今年度の始めより、先生方も児童も、かなり身についてきていると感じた。 〇全学年で計算大会をすることで、勉強を楽しくできるので、とても良い取組だと感じた。これからこの成果が出るのが楽しみだ。 〇来年度から総合的な学習の時間や生活科で、もっと地域に出て学習する機会が増えると、もっと児童たちの「地域や社会をよりよくするために何をするべきか考える」という事ができるようになると思う。 〇引き続き授業力向上に務めてください。成果が上がっていると思う。
				・単元末テスト平均正答率	低学年:90 中学年:85 高学年:80	低: 91.8 中: 81.7 高: 86.2	低: 89.4 中: 84.5 高: 89.9	低: 99% 中: 99% 高: 112%	B B A	単元末テストの平均正答率は、高学年は目標を達成した。教科別に見ると、国語科では、6学年中5学年、算数科では、6学年中3学年が目標を達成している。どの学年も算数科に課題があり、特に「数と計算」領域に課題がある。基本的な四則計算や筆算の定着に課題が見られる。	日々の授業では、児童が主体的に学べるようにするために、児童のつまずきを予想し、具体的な手立てを考え、個の実態に応じた指導を目指す。また、ドリルタイムでは、四則計算の定着を確実なものとするために、全校一斉で計算大会を実施する。正答数や取り組み時間を記録していくことで自分自身の伸びを実感させ、学習への意欲向上もねらう。	5			
			◎繰り返し学習の改善・徹底による学力の向上 ・学力調査、学習環境の結果分析をもとにした取組の実践 ・家庭学習の改善・工夫	・標準学力調査（12月実施） 全国平均を上回る児童の割合	70		国語 (68%) 算数 (78%)	国語 (97%) 算数 (111%)	B A	学年平均では、全ての学年が全国平均を超えることができた。しかし、全国平均を上回った児童の割合は、国語科68%、算数科78%で、算数科は目標を達成した。国語科は、「話すこと・聞くこと」、算数科では、「数と計算」の領域に課題が見られた。	・全国学力状況調査に向けて計画し、全教職員で取組を進めていく。 ・今回の結果から課題を分析し、各クラスで児童につけたい力を再度確認し、授業改善を図る。	5			
		(2) 探究的学びの実現を図る。	◎「総合的な学習の時間」「生活科」等における探究的学びの充実 ・単元開発、カリキュラムマネジメントの実施 ・地域等の人材や地域の施設等の活用	・児童が主体的・協働的に探究することができる単元開発及び単元構成の工夫、効果的なカリキュラム・マネジメントを実施した教職員の割合 ・「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えている」児童の割合	100 70	100 91.6	100 86.5%	100% 123%	A A	・1学期に引き続き、2学期も目標を達成した。各担任が単元開発をする際に、他教科との関連を考えながら行っていることが、目標達成につながったと考える。 ・「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えている」児童の割合は86.5%で目標値を上回った。地域との関わりを意識した単元開発を行っていることが目標達成につながったと考える。	・生活科や総合的な学習の時間を中心にカリキュラムマネジメントを作成し、探究的な学びの実現を目指す。 ・来年度に向けて、生活科や総合的な学習の時間を中心に地域について考えたり、関わったりする活動を仕組み、児童が地域や社会をよりよくするために何ができるか考えられる場を多く設定する。	5			
豊かな心と元気な体	健やかな体と豊かな人間性を培う。	(1)基本的生活習慣の確立を図る。	◎挨拶、清掃、靴揃え、机の整理・整頓の徹底 ◎生活習慣の改善を図る取組の実施 ◎豊かな読書活動の推進	・学期に1回アンケート調査を行い、 肯定的評価をする児童の割合 肯定的評価をする教職員の割合 ・学期に1回家庭での生活改善週間の取り組みを行う。 ・必読書の目標冊数（低学年：学期に10冊、高学年：学期に6冊）を達成した児童の割合	95 100 75	88.2 92.7 98	86.9 86.1 98	91.4% 90.6% 98%	B B B	・アンケートの肯定的な評価をする児童の割合は86.9%だった。ほとんどの項目が1学期と変わらなかったが、挨拶の項目で肯定的な回答をした児童が1学期の90%から86.6%に下がった。そのことも受け、現在児童会が中心となってあいさつ運動をし、よかった学年を放送したり、表を作り、そこにシールを貼ったりするなど、児童が意欲的に挨拶ができる環境を作っている。教職員の肯定的な割合は86.1%で、80%を下回るものもあった。 ・生活改善週間の取り組みを行った児童が98%であった。自分一人で取り組むことが苦手な児童がいた。	・90%に近い数値のものもあったが、下がっているものもあった。児童会の新しい取り組みの成果も出ている途中であるので、児童の様子を見ながら、継続していくのかを検討していく。 ・生活改善週間の取り組みが児童だけでは難しい場合には、引き続き保護者と連携するなどをし、少しでも行えるようにする。	5			〇家庭読書習慣の低さに対しては、なかなか難しいと思う。今後の取組に期待する。 〇生活習慣を整えることは、児童の心と体の成長にとても大切なことなので、これからも続けてほしい。 〇家に帰って外で遊ぶ児童が年々少なくなっていると感じるので、学校でしっかり体を動かせると良いと思う。 〇少人数ではあるが、言葉遣いに時々驚くことがある。（放課後子ども教室） 〇基本的生活習慣の確立は中学校でも課題。自己肯定感の向上にもつながることから、継続した取組が大切だと思う。
						74.6	72.7%	97.4%	B	必読書の目標冊数を達成した児童の割合は、72.7%で目標値に2.3%届かなかった。三原ブックスの取組と必読書の取組が重なり、本の種類が違うため、どちらの取組も目標値を達成するだけ読書をさせることは、難しかった。	「豊かな読書の推進」という目標達成に向けて、読書習慣の定着を図るため、図書委員会を中心とした豊かな読書活動の工夫、朝読書・読書対話の取組、家庭読書の取組等、継続的な取組を進めていく。	5			
		(2)道徳教育の充実を図る。	◎主体的・探究的学びを行動につなげる道徳教育の実施 ・考えを深める道徳の授業づくり ・学びを行動につなげる道徳教育の実践	・道徳の児童アンケート項目において、肯定的に回答した児童の割合	85	86	85.3%	100.3%	A	児童アンケート10項目の平均は目標値を超えたが、85%を下回った項目が3項目あった。特に「自分にはよいところがあると思う」の項目が1学期より約7%下がった。道徳科の授業についてのアンケート5項目の平均は88.4%で、1学期より上がった。（1学期86.8%）特に「自分のためになると思う」「自分の生活に生かしている」の項目はどちらも1学期より3.4%上がっている。授業改善の取組の成果が出たと考える。	・引き続き、「考えを深める道徳の授業」「学びを行動につなげる道徳教育」の取組を進めていくために、研修を実施し、日々の道徳の授業の充実を図る。 ・児童の自己肯定感を高めるための取組の改善を図る研修を実施し、今以上に意識して全教育活動で行う。	5			
		(3)健康の保持・増進と体力の向上を図る。	◎体力つくりと食育の推進	・体を動かすことが楽しいと感じる児童の割合 ・食べ物や食事を作る人に感謝しながら食べる児童の割合	85 90	87.0 84.8	91.1 88.9	107.2 % 98.8%	A B	体を動かすのが楽しいと感じる児童の割合は107.2%と目標を大きく上回る達成度であった。運動しやすい時季も長くあり、児童は積極的に体を動かすことができている。 感謝しながら食べる達成度は98.8%と中間よりは伸びたが、目標をやや下回った。低学年ほど肯定的な評価が低い傾向にあるのは変わっていない。	引き続き体育を中心に体を動かす楽しさが感じられるような取り組みを、体育朝会や休憩時間、児童会のレクなどとも連動させながら、体を動かすことに否定的な児童も巻き込めるよう、進めていく。今後の食育指導や、給食指導、道徳などの関連単元において、学習を積み上げ、肯定的で前向きな声かけを進めていく。否定的な児童は固定化されている傾向があるので、量の調節や、目標の設定など、個別にアプローチしていく。	5			
信頼される学校	保護者・地域の願いに応え信頼される学校づくりを推進する。	(1)情報を公開し理解・信頼を高める。	◎保護者・学校関係者評価委員の客観的評価による改善 ◎地域貢献活動による、郷土愛の育成	・保護者アンケートによる肯定的評価の割合（年2回） ・学校関係者評価における肯定的評価4段階で3．2以上 ・年に2回の地域貢献活動の実施、児童アンケートで「自分から積極的に活動に参加できた」「須波の地域に貢献したいと感じることができた」児童の割合	90 100 95	88 89	98 100 92	109% 100% 97%	A A B	・保護者アンケートによる「各通信やホームページなどで、児童の頑張りや学校の様子が分かる」の肯定的評価は98%で目標値を達成した。通信やHPで児童や学校の様子の継続的な配信、写真の大きさや鮮度等に気を付けながら配信していったことがよかったと捉えている。 ・2回目の地域貢献活動は、各学年ごとに実施した。1・2年はふれあい遊び、3年はコミセン見学・体験、4年は防災の取組をチラシにして配布、5・6年は、須波っ子太鼓の発表をした。実施後のアンケートでは、「地域に貢献したい」と回答した児童が95%、「自分から積極的に参加できた」が89%で、合わせると92%で目標値にわずかにとどかなかったが、前回より、どちらの項目も少しずつ上がっている。	・引き続き児童の頑張りや学習活動の様子がよく分かる通信、HPにしていく。月1回は児童の様子を掲載できるよう、担当を決めて作成し、掲載頻度を増やしていく。 ・CSの導入に向けて、児童の実態や教育課程に沿った内容で、地域の人、もの、こととのつながりを作りながら、郷土愛を育成できる体験活動を実施していく。	5			〇毎年地域との関わりが増えている事を実感している。（いろんな方々との関わりの中で）実践成果の表れを期待する。 〇学校だよりを通して、児童の様子がよくわかってよかったので、来年度も続けてほしい。 〇各学年の特色を出しながら、いろいろな体験をし、豊かな心やお互いを思いやる心を育んでいってほしい。また、先生方も無理なく元気に業務をこなしてください。 〇保護者、地域、保幼小中の連携をこれまで以上に充実させてください。 〇CS導入に向けた取組が確実に着実に行われていると思う。
		(2)幼保・小・中連携の充実を図る。	◎こども園等・中学校との連携による系統的・組織的な教育の推進	（小中合同授業、授業交流、合同研修、保幼小合同活動等の充実） ・学期に1回以上実施	100	100	100	100%	A	・2学期以降には、小中連携活動として、中学校のブロック公開研究会への参加、小学校の教育研究会への中学校からの参加、中学校体育教諭による5・6年生への陸上教室を実施した。また、幼保小連携として、幸崎保育所への2回目の見学（2名）を1月に実施し、学期に1回「以上の目標を達成した。	・児童数・生徒数の減少を受け、今の現状・実態に合った小中連携の在り方を小中で話し合い、再構築していく。 ・地域に幼稚園や保育所が無いという実態の中で、幼保小連携の充実に向けて何ができるかを模索し、研修後の情報共有、よい事例の積極的な実践、次年度入学予定児童の情報収集、入学説明会での体験活動の実施等、できることを考え進めていく。	5			
		(3)「働き方改革」の推進を図る。	◎主体的に業務改善を図り、計画的・協働的な業務の遂行	・計画的・協働的に業務を遂行できた教職員の割合 ・月45時間以内の業務遂行 ・年休5日間以上取得者数の人数	80 90 90	91 89 81	100 90 81	125% 100% 90%	A A B	・計画的・協働的に業務を遂行できた教職員の割合は、100%だった。各部や分掌担当で進捗状況を確認しながら、優先順位をつけて業務にあたることで、スケジュール管理ができた。 ・45時間以内の業務遂行は、年度初めの繁忙期に4月5人、5月1人、10月4人45時間を超過し、達成値は90%であった。 ・年休取得は、81%（11人中9人）が達成している。	・今後も各部や分掌担当で進捗状況を確認しながら業務にあっていく。業務改善につながる案を考え、児童と向き合う時間確保につなげる。 ・教職員の健康や安全に互いに注意を払っていく。 ・月45時間以内を意識しながら業務にあたる。 ・春休みを活用して年休取得達成にむけて計画していく。	5			

【j：自己評価　評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

【Ⅰ：学校関係者評価　評価】
イ：自己評価は適正である。　ロ：自己評価は適正でない。　ハ：分からない。